



そうだ、
京都娘
でござる。

著：相山タツヤ

キサラ

京都生まれのコスプレ女子。

親が転勤族で、行く先々で京都弁の披露を求められた事から、周囲に手っ取り早く親しまれる為の手段として京都弁を常に「演じる」ようになる。

常にいい子であろうと繕っている故に、今では漫画喫茶が唯一の心安らげる場所となっている。

職業：イメクラキャスト

趣味：漫画喫茶でBL漫画を読みふけること

特技：エアコン掃除

好きな食べ物：唐揚げ

嫌いな食べ物：レモン

好きなタイプ：からかい甲斐がある人

嫌いなタイプ：自分がモテてると思ってる奴

好きな四字熟語：刺突爆雷

嫌いな四字熟語：五里霧中



イラスト：はる様

僕は、この漫画喫茶が好きだ。

何というか、ここに居ると救われる気持ちになるのだ。

都内某所にある二十四時間営業の漫画喫茶。マットブース40席、リクライニングブース20席、ワイドソファブース5席。ソフトドリンク飲み放題、コミック読み放題、有料シャワー付き。

僕の休日は大抵、この場所で消費される事になる。自宅で肩身の狭い思いをして家族と過ごすのが嫌だからだ。

現在、夜九時。

「クソツ……面白え……面白えじゃねえか……この漫画……」

ヘッドホンを着けてマットブースで寝転がっていた僕は、たったいま読み終えた漫画をパタンと閉じ、大きな感嘆の息を漏らした。

それはネット上ではありきたりだとかテンプレだとか酷評されているラノベ原作コミカライズ作品で、実際どれだけつまらないのか興味本位で読み始めてみたのだが、これが存外面白く最終巻まで一気に読み終えてしまった。

自分にとってはここまで面白いのに不評で打ち切りになってしまおうとは、この世は本当に冷たいものだとしみじみ思う。幸い、ツイ○ターで作者のアカウントの呟きを確認すると、また新作の連載に向けて準備を進めているようだが。

「強く生きてくれ……生きてる限り、チャンスはあるんだから……」

つい上から目線の独り言を漏らしてしまい、すぐに僕は自嘲する。僕は他人の心配をする前に、まず自分のことを心配すべきだというのに。

しかし、この世に消えていい漫画家など一人もいないのも確かな事だろう。彼らは無限大の夢をくれる。僕の命と引き替えにしても、皆生きるべきだ。

余韻に浸り終えた所で、さて別の漫画を借りに行こうと思ひ、ネット音楽を聴いていたヘッドホンを耳から外した。

そこで、異変に気付く。

「……………んっ、だめっ……………こんなところで……………」

女性の艶っぽい声が壁の向こうから聞こえる。

さては音漏れに気付かずアダルトビデオを見ている利用客がいるのかと思ったが、やけに布擦れの音が生々しく、時折ブースの壁が僅かに軋む。まさかと思い、僕はひどく緊張した心地で壁に耳を当て、隣のブースの音を聞く。

「静かにしないと他の人にバレちゃうよ？　こここのブース、壁薄いからね……………」

「いやんっ……………店員さんに見つかったらっ……………ああんっ……………大変なのになっ……………」

「この店員、みんなやる気ないから大丈夫だよ……………居眠りしてる奴だっているし。もし聞かれたって、俺たちを注意する度胸なんてないから……………ほらっ」

「ああっ………！ 奥っ、すごいっ………」

なんてこった。僕は唾然とする。

間違いない。隣のブースで男女がセックスしている。

僕は否応なしに膨らんでいく自分の股間に手を当てながら、隣のブースに入った客についての記憶を呼び起こす。彼女のことはよく覚えている。

黒艶のある髪をツインテールで纏めた、ややゴスロリっぽい雰囲気のマイド服を着た可憐な女の子。時々見かける常連客で、メイド喫茶で働いているのかその衣装のまま来店しているの、人と不要な交流を持たない僕でも強く印象に残っている。

最後に見たのは、この漫画を借りに行った時。彼女はきわどいBLモノの漫画を選んでいたはずだ。

男と一緒に居る現場など見ていないが、まさか僕が漫画に熱中している間に連れ込んだのだろうか。もとより自分とは絶対に縁のなさそうな美人だとは思っていたが、ここまで

貞操観念が低いとは、やはり女性は別世界の生き物としか感じられない。

……あの娘が、ブースの中でセフレとセックスしてるのか……。

生々しい想像がよぎり、僕は生唾をゴクリと飲み込む。

間近で他人の性交現場に遭遇するなんて、もちろん初めてだ。しかもこんな公共の場所で。

耳を澄ませると、くちゅっ……ぬちゅっ……と粘った水音まで聞こえ、そのリズムに合わせてブースの壁が振動し続けている。

「……んっ……ひうっ……！ ゴム、ないんだからっ……ナカには、出さないでねっ……」

「ああ、善処するよ……。つーか、オマンコすごい濡れてるじゃん……。イヤイヤ言っといて、ほんとは興奮してるんでしょ？」

「……言わないでっ……あんっ……！」

避妊具無しでの性欲任せな獣のごときセックス。いかがわしいことこの上ない。僕はたまらず、ズボンの上から股間をさすり始めた。

社会通念上、僕がすべきことは店員にただちに報告して注意をしてもらうことであるが、今はそんなことは考えられない。

あのメイド服の娘が、今まさに男とナマで性交している。あのスカートの向こうにある膣で、いきり立った男性器を受け入れ、愛液を濡らし締め付けて射精を促しているのだ。こんな極上のオカズ、二度とない。

……うう、僕だってヤリてえ……!!　せめて、想像でぶっかけてやる……!!

ティッシュ箱を側まで引き寄せて、ズボンのベルトを緩めようとした、その時。僕のブースのドアがノックされた。

「ひっ!?!　は、はい!?!」

店員が来たのかと思います、僕は慌ててズボンから手を放す。そこでスライド式のドアが、スウッと少しだけ開いた。

「……えっ？」

信じられない事に、ドアの隙間から顔を覗かせているのは、件のメイド服の女子だった。どこか疲れた表情で僕を見つめている。

「なあ、おにいさん……ここ、入ってもええ？」

彼女に初めて声を掛けられたこと、そして明らかに関西地方の喋りであることに、僕は二重で驚く。

「ええ……？」

「もう、いけずせんといて……？ おにいさんも聞こえとるやろ、ウチの隣に入っとるカッブルが盛り始めたさかい……これじゃあおちおち漫画も読めん。せやから、コトが済むまでおにいさんのところにお邪魔させてくれん？」

彼女は苛立った目つきを二つ隣のブースに向けてから、脇に抱えたBL漫画を見えるよ
うに出した。

ようやく僕は本当の状況を理解した。バカップルの性交音と振動が、彼女のブースを貫通して、僕の所まで届いていたのだ。彼女が男を連れ込んだと思っていたのは、完全な誤解だったらしい。

「なるほど……てっきり……」

「てっきり？ まさか……おにいさんはウチがオメコしてる思っとったん？ はあ……危
うくおにいさんのオカズにされるとこやったわあ」

「ち、違うって……！」

彼女はククツと引きつったような笑いをこぼしてから、僕のブースにずかずかと入ってきてドアを閉じた。了承の返事などしていないが、お構いなしのようだ。

「おおきにー。おにいさん、よろしゅうな」

「ま、待って……そんなに騒音が気になるなら、店員さんに言って注意してもらえば……」

「そんなん嫌やあ。ウチがちくったってバレたら絶対面倒やん。厄介事になったらかなんわ」

彼女は我が物顔でマットの真ん中にどかっと座り、持ってきたBL本を積んだ。

急展開過ぎて頭の理解が追い付かない。僕が立ち呆けていると、彼女は「んー？」と両眼を大きく開いて笑みを浮かべた。

「ああ……ウチの名前？ キサラっちゅうの。よろしゅうな、童貞のおにいさん」

「どっ、童貞！？ いきなりなんてこと言うんだよ……！」

「ちやうの？ おにいさん絶対童貞やろと思ってたんやけどなあ。いつもウチが漫画選んでる時かて、チラチラ見とったやん？ 女の子は敏感やさかい、全部お見通しやで。ウチの胸も熱心に見とったやろ？」

美人は美人だが、いちいち笑顔に闇がある。彼女の白い肌色も、得体の知れなさに拍車を掛けているようだ。これがいわゆる『地雷系女子』という奴なのだろうか。

キサラはニヒヒッと笑いながら、自分のメイド服の胸元のジッパーをつまみ、ジジッと少し下ろした。

「ほら、お猿さんみたいに視線釘付けになっとる……。おにいさん、スケベすぎやん？」

「そ、そりゃあ、そんなことされたら流星に見るだろ……！！ 馬鹿にしないでくれよ……！」

「はいはい、かんにんえー、童貞はん」

とにかく無礼で人との距離感がバグっている女性だが、不思議とそこまで悪い気持ちにはならなかった。

それよりも、久しぶりに他人とまともに雑談できた喜びが勝る。普段は人と会話するのは億劫だが、それでも寂しい時は寂しく、ネット上以外で人と気兼ねなく会話できるのは嬉しい事だと純粹に思う。

「あっ、飲み物忘れてきてもうた。どうせ飲み終わったし、次の取ってこよかな……」

キサラは僕の空になったグラスをちらりと確認する。

「ついでに、おにいの分の飲み物も取ってきたらうか？」

「おにい……!?!?」

「ええやん。ずうっと『おにいさん』なんて堅苦しくてしゃあないわ。それで、おにいはお
かわり要る？」

無遠慮な人間だと思いきや気配りが出来る一面も見え、いよいよ彼女のことが分からな
くなってくる。

「えっと、じ、自分で行くよ！」

「そか。ほな一緒行こか？」

彼女の見える笑顔が何だか眩しく思える。こんな風に異性に優しくされるのは、いつぶ
りだろう。

今の僕は、キサラに興味津々だ。僕のようなちよろい童貞男子は、自分に優しくしてく
れた女子にすぐ恋してしまう。

こうして、どぎまぎしている僕と平然とした顔のキサラは、二人並んでドリンクバーに

赴いた。

いつものように僕はお気に入りメロンソーダを注いだ。キサラは信じられない事に複数のドリンクをミックスしていた。コーラとオレンジジュースとメロンソーダとジンジャーエールが混ざり合い、得体の知れない色の液体と化している。

「ええっ？ 何してんの……？」

「特製のカクテルを作ってるねん。見た目はヤバいけど、うまいで？」

最後にソフトクリームをにゅるーっと投入し、放射性廃棄物のようなフロートが出来上がった。

僕がひたすらドン引きしていると、キサラはもう一つグラスを取って、同じ工程で二杯目の地獄フロートを作った。

「ほら、おにい」

「えええっ？　これ、僕の分？」

「そうに決まっとするやろ。なんやと思たん？」

ニカッと笑って突き出されるグラスを、僕は恐々と手に取った。

ドリンク自体の禍々しさと、こうして異性に飲み物を注いでもらう緊張で、僕はすっかりガチガチになってしまう。

「ほな、戻るか。喘ぎ声も終わっとつたらええんやけどなあ」

「う、うん……」

僕は正直、バカップルにずっと盛っていてくれと思ってしまっていた。

事が済んでしまったら、きっと僕とキサラの時間もお終いになってしまうから。

ブースに戻って二人で耳を澄ませると、淫らなよがり声は無くなっていた。

内心がっかりしそうになっていた所で、男女の小声の会話が聞こえてくる。

「くうっ……お前のフェラ、最高すぎ……。上手くなったなあ……」

「……ちゅぽっ……誰のせいだと思ってるの……？ 勝手にナカに出すしさあ……」

「大丈夫大丈夫。どうせ、そろそろお前の子供が欲しいと思ってたところだし……」

「え……？ ほんとに……!？」

「当たり前だろ……ああ、また勃起しちまったよ……今度は本気で種付けしてやるか」

「うれしいっ……」

その流れに、キサラが「ぶち殺したるか……？」と小さく呟きしかめっ面をする。ひとまず、彼女が自分のブースに戻るのはまだ先のことのようにだ。

そういうわけで、僕とキサラは狭いブースの中で肩を寄せ合い、各々の漫画を読み始めた。

ヘッドホンはキサラに貸したので、僕はカップルの二回戦の声を聴きながら漫画を読む羽目になった。

案の定、興奮してページをめくる手が止まりがちになってしまふ。しかも隣には美人な異性がいる。邪なことを考えるなという方が難しい。

僕は気を紛らわすために、キサラの特製フロートに口をつけた。

味がぐちゃぐちゃで正直不味いが、彼女が僕の為に作ってくれたという補正で何とか飲める。

「なあなあ、おにい……ちょい気になったんやけど……」

唐突に、キサラがBL漫画の性交シーンを見せつけてくる。

「男って、尻におちんぼさん挿入されるとほんまに気持ちええの？ 不思議なんやけど」

「んなわけないだろ……！ フィクションだよフィクション」

「ほう、知ってるんやな？ おにいのおちんぼさんは童貞やのに、お尻は処女ちゃうんやね」

「ちよっ……何でそうなるんだよ。おい、僕を嵌めたのか……！」

「ハメただけに、なあ」

キサラは白い歯を見せて愉快そうに笑い、また漫画を読み始めた。

僕の方はいえ、セックスの生音を聞かされ続け、忍耐の限界が近い。

トイレで一発、抜いておくべきか。さもないと、理性が保てずキサラを襲ってしまうかもしれない。僕は「トイレ」とぶっくらぼうに言って、立ち上がろうとした。

そこで、服の裾を掴まれる。

「トイレでシコるん？」

一発で言い当てられ、僕は噴き出しそうになった。

「ど、どうして……」

「分かるでー、そら。おにいのおちんぼさん、さっきからフル勃起やん。トイレでシコシコしいひんと、オツムおかしなりそうなんね？」

キサラはニヤリと口の端を上げて、僕の耳元にずいっと顔を近づけて、囁いた。

「……ウチが、おにいのおちんぼ、気持ちよくしたろうか？」

生温かい息が吹きかかってきて、思考が一撃で爆散しそうになる。

「ちよ、ちよ、ちょっと、それって、どういう……」

「あはは、テンパりすぎやん。ウチも正直、ずっとエロい声聞かされてムラムラしとったん……おにいてもそうやろ？」

「でっ、でも、こういう事は、ちゃんと好きな人と……」

僕がしどろもどろになっていると、キサラは両手で僕の頬を挟み、ぐいっと強く顔を引き寄せた。頭の理解が追い付かない内に、ちゅっ……と唇が合わさった。柔らかく潤った、異性の唇。

キサラは瞳を妖しげに輝かせながら、僕を間近でじいっと見つめる。

「きにしいな……。ウチは、おにいのこと好きやわ。おにいても、ウチのこと好きやん？　な
ら……ええやろ」

「ま、まっ、待って……本当に、心の準備が……」

キサラは僕の口に、はぁっと生温かい吐息を掛けて、細い指で僕の股間を触る。かりかりと爪で勃起した先を擦られて、僕は「あぁっ」と情けなく喘いでしまった。

「おにい、力抜いてええで……？　ただ一緒に気持ちよくなるだけや……」

そう言って彼女は僕の背中に腕を回し、再び顔を寄せてきた。唇が重なる。ドリンクの甘い香りがした。

「んっ……ちゅっ……」

僕に抱きついたキサラは心地よさそうな息を漏らしながら、積極的に唇を押し当ててきた。舌をぬるっと差し出して、僕の唇の奥に潜り込ませてくる。

恐々と僕も自分の舌を突き出していくと、ぬちゅっ……と、舌粘膜が触れ合った。その

まま、蛇のようにのたうつ彼女のざらざらの舌と、僕の舌を懸命に絡み合わせていく。

「ん……ちゅう……んんっ……」

キサラは僕の口内で舌をぴちゃぴちゃと動かしながら、僕の股間を優しく撫でた。勃起したズボンのテントを撫でまわし、それからズボンのジッパーを下ろして、その中に手を潜り込ませた。トランクスにひんやりとする彼女の指が入ってきて、その刺激に僕は「うっ……」と驚いてしまう。

弾みで、キスしていた唇がちゅぱつと音を立てて離れてしまった。二人の唾液が混ざった雫が間にゆっくり垂れ落ち、キサラは自分の涎をちゅるつと吸ってから、淫魔のような笑みで僕を見つめた。

「ふふっ……おにあって、こうして女の子に弄られるのも初めてなん……？　なら、もっと気持ちよしたるえ……居候のお礼もせなあかんしね」

キサラはしなやかな指で、僕の勃起したペニスを取り出し、指で肉幹を握ってこすこすと動かし始めた。

自慰とは違うこそばゆさに、僕は呻き声を我慢するのに必死だった。

彼女は続けて張り詰めた亀頭に顔を近づけて、熱い息を吐きかけてきた。その刺激に、膨張した海綿体がぶるんつと反応してしまう。

「あははっ、おもしろいなあ。えらい、びくんびくんしてはる。いっぱい出しとって、おちんぼ、せわしないんやなあ？ ええで……ウチが、したるさかい……」

ついにキサラが僕のペニスの先端に、ちゅう……とキスをした。そのまま、くぶぶ……と唇の奥に僕の肉棒を呑み込んでいく。

「ああっ……うああああ……」

僕は、その未体験の刺激に、膝をがくがくと震わせた。

熱い唾液に満ちた彼女の口内粘膜が、ペニスにねっとり密着してくる。オナホールとは比べ物にならないほど生々しい刺激。柔らかい唇が肉幹に吸い付いてくるだけでなく、唾液でたっぷり濡れた舌と頬肉が包み込んでくる。

キサラは、打ち震える肉幹の根元を小刻みに指で擦りながら、舌をぬるぬると動かし始めた。

ひととき敏感なカリの部分を舌でにゅるっと舐め上げられて、僕は思わず先走り汁をじわり漏らしてしまう。

「うううっ……キサラっ……!」

僕の童貞ペニスが、今日初めて出会った女の子にフェラチオされている。これは何の奇跡だろうか。

「くちゅ……んぶっ……ちゅぶ……ちゅぶ……」

彼女は軽い舌鼓をして刺激を変えつつ、僕のペニスを余すことなく舐めまわしていく。ぢゅぷっ、ぢゆる……と淫靡な音を立てて強く吸い上げつつ、舌をねっとり絡ませてペニスを味わっていた。軟体生物のごとく不規則な動きで蠢く舌が、一切の予断を許さない狂おしい享樂を引きずり出してくる。

『クチマンコ』という言葉を最初に生み出したのは誰だか知らないが、言い得て妙だ。これが、まだ前戯でしかないなんて。本番に入ってしまったら、僕は一体どうなってしまうのか。

「んむ……ぐぷっ……んん……こぷっ……ちゅ、ちゅっ……」

時折キサラは上目遣いで僕の反応に愉悅しながら、頬張ったペニスを喉奥まで呑み込んでいく。そして喉奥の肉をくうっと締めて龟头を刺激し、それから唇と舌を隙間なくまわりつかせながら、ぢゅぽ……と引き抜いていき、再びぐぷぷと呑み込む。

女の子が普段会話する為に使っている口が、性行為の時にはこれほどの快樂をもたらす

ことが出来るとは。僕はひたすら初めて堪能する異性の身体に圧倒され、苦しい息を漏らす事しかできない。

「ああ……キサラの口の中、すごすぎるっ……」

「……んふう……んん……はあっ……んむっ……ぢゅっ……」

苦しげに呼吸をしながら僕のペニスを啜えてくれるキサラが、今は愛おしくて仕方がない。これほどの慈悲を受けたことが、今までの人生にあっただろうか。

ただ奉仕してもらっているだけでは申し訳なくて、僕は恐々と手で彼女の背中を撫でてあげた。

彼女の身体がピクリと反応し、口に含んだペニスがより強くちゅうっと吸われていく。

「……はあっ……ん、んん……」

キサラの呼吸も何だか艶っぽい。彼女も興奮しているのだ。

僕は絶え間なく与えられるフェラチオの快楽に震えつつ、彼女の身体を優しく撫でていく。背中をソフトタッチで触った後は、滑らかな太ももを撫で上げ、そのまま彼女のお尻へ……。

「……んむっ……！」

ペニスに歯が当たった。痛くはなかったが、彼女を驚かせてしまったようだ。キサラは僕のペニスを頬張りながら、僕をムツとした眼差しで見上げた。

「あ……ごめん……！」

彼女の目元がニツと緩んだ。急にキサラは口を前後させるペースを上げ、さらに激しく舌を動かしてペニスを責め立ててきた。

じゅぽじゅぽじゅぽと下品な音を立ててペニスをしゃぶり、それから陰囊を揉みながら、ぢゅううううと強く亀頭を吸う。まるで強制的に精液を絞り上げにきたようだ。

「ひゃああつ……まつ、待って……す……すぎるう……!! 止まって……!!」

急速に精液が込み上げていく感覚に僕は喚くが、キサラは口を放さない。それどころかさらに根元をコスコスと擦りまくって、射精を促進させてくる。

「あつ、あああああ……!!」

今までに感じたことが無いほどの熱い滾りが尿道を駆け抜けて、弾けた。

ペニスを深くまで呑み込んでいたキサラの口内に、ビュルルルツ———と思い切り射精する。

巨大なオーガズムに打ちのめされた僕は、まともに呼吸も出来ないまま、ドクンドクンとペニスを激しく脈動させて大量の精液を放つ。

キサラは全く嫌がることなく僕のペニスにしっかりと食いついて、ドクドクと注がれていく精液を飲んでいく。

ぢゆるるるっ……とストローを使うように鈴口を強く吸われて、僕の頭はどうとう真っ白になる。

「……ああ、うああああ……」

目が眩んだ僕は、すっかり心を墮とされたうわ言を漏らした。

最後の一滴まで僕の精液を飲み干したキサラは、舌をぴちゃぴちゃと動かして、余った雫を味わいつつお掃除フェラをする。

つくづく、夢としか思えない体験だ。

「はあ、はあ……」

「……ふふっ、おにい……ウチのお口、どうやった……？ まあ、聞くまでもあらへんか」

フェラを終えたキサラは、惚けている僕を上機嫌に見やりながら、フロートを飲んで口直しをし始めた。

「なあ、おにい……ウチのことも気持ちよろしくしてや。おにいのこと満足させてあげたんやさかい……」

頬を紅潮させたキサラが、再び僕に抱きついてくる。

続きは本編で！
